

アカザ等の食用山菜が多く、夏はこの葉を取って岩塩で炊いて空腹をしのいだものでした。

昭和二十二年十月末頃、私どもが農園で作業中、農場長から、「明日東京ダモイができるぞ」という話を聞いて驚きましたが、命令どおり、翌朝アルチョム駅で有蓋貨車に押し込まれ、一昼夜汽車の旅でナホトカ港に到着。ナホトカの収容所では、「これが日本人か」と思うようなキビキビした「日本共産青年同盟」とか言う行動隊員の宣教運動の特訓を受け、学習の結果、成績のよい者だけ日本に帰すのだと搾られたが、結局一カ月足らずの教育で終了。十二月二日、日本郵船の「山澄丸（二二二四人乗船）」でナホトカ出帆。同月五日、舞鶴港に上陸。夢にまで見た懐かしの日本に生きてたどり着くことができました。

三、子孫や国民に言い残したいこと

戦争の悲惨さを経験した者はもちろん、直接戦争に参加しない者でも、戦争の恐ろしさは身にし

みてわかっていると思いますが、世の中でこんな不幸なことはありません。

これからは絶対に戦争はしないで下さい。そして、家では父母を大切に、兄弟仲よく、仕事に励み、明るい家庭生活を築き、平和で豊かな世の中を守って下さい。

最後に、皆さんの御多幸を祈りながら私のシベリア労苦生活の報告を終わります。

強制抑留者が語り継ぐ労苦

山梨県 天野 蕃 太

一、出生から終戦まで

私は、大正十五（一九二六）年二月二十七日、富士山北麓の景勝地、山梨県南都留郡山中湖村平野で出生。村立平野高等小学校を卒業。昭和十六（一九四一）年三月、茨城県内原満蒙開拓義勇軍訓練所に入所、幹部養成所卒業。昭和十八年三

月、東安省密山県掲木崗村新立地に入植、開拓事業を指導中、昭和二十年六月、満州国黒龍江省神武屯第八六野戦砲兵連隊に入隊。その後部隊編成替で、チチハル野戦砲兵隊で観測手としての資格取得。八月十五日、天皇陛下の終戦詔勅時はハルピン市の飛行場警備中であつて、直接放送を聞くことはできなかったが、後で中隊長から「敗戦だ」と聞き、信じられず、ソ連軍の南下に備えて決死隊を編成して警備を厳重にしておりました。が、八月二十日頃、ソ連戦車が飛行場内に侵入、私どもは戦わずして武装解除され、そのまま格納庫に捕虜として抑留されました。

九月初旬、突然「東京ダモイ」という命令に、喜び勇んでハルピン駅から中隊編成のまま荷物貨車に乗せられ満州鉄道を牡丹江駅まで南下しましたが、それ以降鉄道が使えず、徒歩行軍でソ満国境を通りシベリア鉄道沿線にたどり着きました。約十日くらい苦勞して、ようやく歩いたことを思い出します。

シベリア鉄道の田舎駅で家畜輸送貨車に押し込まれた私どもは、「ウラジオ經由で日本に帰るのだ」というウソを信じて、車中での空腹を乾パンや生米を食って耐えていましたが、十日間も汽車に揺られ、バイカル湖を過ぎて降ろされたところはタイセツトという大きな街でした。

タイセツトはシベリアの中心地に位置し、バイカル湖に近く、ソ連の軍事、交通、産業の要所で、特にスターリンの五カ年計画の重要地点として発電所施設が計画され、日本人捕虜はその人夫として使われるのだと聞かされました。

二、タイセツト囚人収容所での地獄の勞役

タイセツトでは第三収容所と呼ばれ、作業大隊は一千人でした。ここはタイセツト市の郊外の原始林近くの原野にあり、宿舍の大きさは一棟百人も寝起きできる二段ベッド式で半地下造りの丸太小屋で、中は真つ暗ですが暖房がペーチカ式で、石炭の火力で暖かでした。

給与は黒パンと雑穀の雑炊。定量は表示してありますが、ソ連側にピンハネされていつも六〇パーセントくらいしかもらえず、重労働を強いられる私どもは空腹の毎日で、私どもの身体は次第に痩せ細り栄養失調症になり、作業中自然死する者も出ました。私も極限まで追い込まれましたが「ここで死んでたまるか、どんな苦勞に耐えても生きて故郷に帰るのだ、俺はまだ若いのだ」と自分を励まし、氣力で支えてきました。労働時間は八時間（午前八時から午後五時）。労働は主として山林伐採で、土木掘削、工事場雜役、農園手伝い等種々ありましたが、いずれの作業もノルマが高く、日本人では一〇〇パーセント達成できずに苦勞しました。また衣服の支給もなく着のみ着のまま、その上入浴も月二度くらいですから真つ黒の上、シラミや南京虫が多発し、伝染病も出たりして最悪の環境でした。

幸いなことに、シベリアの原野には日本の高原（富士裾野）にあるような野草が多く、アカザや

ヨモギ、ミズブキなど若葉を摘んでビタミンA B Cの補給だとか、白樺の木の水滴を集めて「天命水」だと言ってみんな飲んで飲んだものでした。

しかし、昭和二十三年六月頃から給与もよくなくなり、衣服の支給もありました。聞くところによると、ほとんどの日本人捕虜は昭和二十三年中には帰国させたのに昭和二十四年まで帰国できない捕虜は、その地方の特別重要な施設建設のための要員としてソ連に貢献したためであると収容所長が得意に話をしてくれました。

三、夢の「東京ダモイ」に感泣して

昭和二十四年七月中旬、私どもが農園作業から帰営すると突然収容所長から、「皆さんは明朝東京ダモイだ」と発表され、早速私物検査があった。私どもは持ち物はほとんどないのに紙切れまで取り上げられました。翌朝、例の家畜輸送貨車でタイセット駅を出発。シベリア鉄道を南下、ハバロフスクを通過してナホトカ港に到着。

ナホトカ港では、特訓された「日本共産党青年突撃隊」と自称する赤旗腕章の行動隊の指揮によって十日間も「共産革命理論」やレーニン、スターリンのロシア革命史の講義や「赤旗の歌」など、にわか仕込みの学習活動に追い回されたが、これも帰国のための踏絵であると我慢して真剣に勉強しました。

昭和二十四年七月二十九日、日の丸の旗をなびかせた大きな客船「明優丸」がナホトカ港に接岸、私も一人一人点呼を受けて乗船。八月一日、夢に見た舞鶴港に上陸し、生きて日本の土を踏むことに感激しました。

四、家族や国民の皆さんへの遺言

シベリア抑留中のあの地獄の生活を耐え抜いてきた今、しみじみ人の生命の尊さと、人は助け合ってこそ生きられることを知りました。どうかこれから次の三つを守り、よい世の中をつくって下さい。

- 1 これからは絶対に戦争はしないこと。
 - 2 親は子を、子は親を大切にすること。
 - 3 自分の行動に責任を持ち、健康でいつもよく働くこと。
- 以上申し上げ、私のシベリア抑留労苦調査報告を終わります。

私のシベリア抑留記

新潟県 富山 直次

まずソ連が参戦して満州に進駐した当時から記してみよう。

昭和二十(一九四五)年八月、日時は定かでないが、牡丹江には既にソ連軍が入っていた。勃利最後の撤収部隊の一員として牡丹江でソ連軍に遭遇し、散り散りばらばらになって目的地のハルビンに向けて山の中を食うや食わずで十五日夕方ハルビン市の郊外にたどり着いた。そこには関東軍